提言 「あの戦争」を子どもに語るキーワード

敗戦で得たものを問いなおす迂回を

静岡大学教授 馬居政幸

一　戦争の本質とは

始めに私の立場を明確にしておきたい。

大阪で工員をしていた私の父は、二十歳で受けた兵隊検査のあと、そのまま「現役兵」としてビルマ（当時）に送られ、終戦という名の敗戦の日を迎えた。そして戦地で患ったアメーバ赤痢が原因で、私が中学に入学する直前に亡くなった。大東亜共栄の大義を掲げ、帝国の存亡をかけた自衛戦争であったとしても、私にとって「あの戦争」が父の命を奪ったという事実の重みに代わるものではない。

『あの戦争になぜ負けたのか』（文春新書五一〇）において、加藤陽子氏は「吉田裕氏によれば、陸軍の総兵力に占める現役兵の割合は、昭和十二年（一九三七）が三七・三パーセントであったのに対して、昭和一九年には五八・四パーセントに達していた」（一八六頁）と述べている。

いかに美辞麗句で語られようとも、戦争の本質は殺し合いである。それも、大義を語り、開戦を決定し、戦略と戦術を練る側ではなく、命令される側の兵士が互いの命を奪い合うのが戦争である。しかも、その兵士の多くは、私の父のように、社会の下層に属する若い男性である確率が高い。「あの戦争」の教育は、この事実を教えることから始めなければならない。直接、人を殺すことを強いられた兵士が生存し、その兵士の命を引き継ぐ者がいるかぎり、「あの戦争」を歴史の解釈のみにゆだねるべきではない。

しかし、このことは「あの戦争」を断罪し、自国の軍隊を拒否することではない。他国との戦争への備えを怠ることでもない。逆である。戦争を起こさないためにこそ、「あの戦争」を介して現代の軍と軍事の重要性を教えることから逃げてはならない。そのために私が提示するキーワードは、「加害と被害」「勝者と敗者」「国と民」である。

二　加害と被害のスパイラル

「一億総懺悔」という言葉がある。一九四五年八月一八日に組閣された内閣の東久邇首相が、八月二八日の記者会見で発言し有名になった。小熊英二氏は「もちろんそれは、連合国やアジア諸国に、日本の侵略を謝罪するという意味ではなかった。それは彼らが、敗戦の屈辱感を表現するために、敗北の原因として『道義の頽廃』を見出すなかで発せられた」（『民主と愛国』新曜社　六九頁）と解説する。

国民すべての力を結集して戦った総力戦であった以上、敗戦の責任は国民すべてが負うべきとの心情が前提にある。当然、世論は戦争遂行者の責任を曖昧にすると批判し、その矛先を開戦の責任へと進めた。それは被害者に回る人を増やすことでもあった。そのピークが東京裁判によるA級戦犯ではないか。昨今はこの裁判の正当性を疑問視する論調が優勢だが、私は裁かれた者以外に戦争責任の免罪符を与えたことを問題視したい。一億総懺悔転じて一億総被害者になった。だが「あの戦争」の導火線となった国際連盟脱退をあおり、米国との開戦を祝す号外を出した新聞の責任はどうなるか。その新聞を買い求め、兵士が勇猛果敢に戦うことを願う手紙を入れた慰問袋を作った人はどうか。

問題は加害責任を逃れたことではなく、だれもが加害者にも被害者にもなり、加害と被害が螺旋状に広がった「あの戦争」の実態を問い続けなかったことである。その結果、戦場となったアジア各国とりわけ韓国と中国からの加害性追及に正面から応じる論理と心情を生み出せなかった。非難されるままに自国の加害性を強調する人たちも、それを自虐史観と批判する人たちも、被害と加害が重なり合う「あの戦争」の実態を無視する点では同じである。被害性のみ強調する国と民に、自らの歴史にある被害と加害の構造を問い直すモデルを示しえない点でも同じである。

三　敗者が勝者に、勝者が敗者に

六〇年を経てもなお「あの戦争」の加害性を一方的に強調する隣国の存在を許した要因をもう一つ指摘したい。そ

のために祖母の言葉を紹介しよう。

「戦争に負けてよかった。軍人がいばらなくてすむ」

祖母と同様に敗戦を受容した民は少なくなかった。私自身が敗戦による日本の変化で生まれた。農地解放で田畑を失った不在地主の娘が、家族を養うために働きに出た工場で出合ったのが、再び工員になっていた父である。

勝者である米国が強いる改革を梃子に、敗戦国日本は軍と軍事を米国にゆだね、持てる資源を自国の経済成長につぎ込んだ。「あの戦争」を国と民の総力戦にするための法と社会と心の仕組みが日本型経営システムの基盤になった。

他方、敗戦を契機に独立した半島国は、分断国家として軍と軍事を最優先することを強いられ、日本からの解放は国権を奪われる因となった旧習をも蘇らせ、国と民の再構築を妨げた。戦勝国になった中国も内戦後の混乱を克服し、中華の覇権を行使するまでに60年の時を必要とした。

四　軍と軍事を統御する「国」の「民」に

「あの戦争」の歴史を敗戦までの四年間に閉ざしてはならない。敗戦を経済戦争の勝者の因に転化し、その勝者の位置への奢りから、新たな経済戦争の敗者になりかけた現代日本が、再構築すべき法と社会と心の基盤にまで、射程を広げる必要がある。戦後の平和国家日本の存在は、「あの戦争」も含む世界大戦の終結とともに生じた国家群の対立の境が、かつて支配した国に引かれ、明治政府の廃藩置県で自国内に取り込んだ王朝の島を、戦勝国に差し出すことで得たフィクションであることを忘れてはならない。

戦争が国家間の外交の延長にある事実を棚上げし、軍と軍事を他国に委ねることで、国と民の安全を確保できるという、敗戦を逆手にとって築いてきた戦後日本を支える条件は失われた。軍を外交の手段に使う隣国と対峙する現実から逃げることはできない。加えて、暴力装置を国家が独占する仕組みは、自国内の秩序を維持する手段でもある。

軍と軍事に関心をもたない民を教え育てることは、再び自らを被害者にする愚を犯す民を再生産することと同義である。「再び子どもたちを戦場に送らない」ためには、軍と軍事を統御する国の仕組みを再評価し、その国を操作する知識と技術を教え、軍事力行使の誘惑に抗する心を鍛えるしかない。そのための教材は、「あの戦争」の「加害と被害」が重なりあう事実と、「敗者」になって得たものを問い直す迂回なしに獲得できないことを強調しておきたい。

提言　「あの戦争」を子どもに語るキーワード

「理想・理念」と「取引・談合」

大分大学教育福祉科学部助教授　永田忠道

「現在の国際関係を脅かしているのは理想の喪失ではなく、理想を高く掲げ、自分の抱く理念を疑おうとしない態度である」

この視点は、今年の年初に新聞紙上に掲載されたものである（平成十八年一月六日『朝日新聞』掲載「私の視点」）。

「理想を高く掲げ、自分の抱く理念を疑おうとしない態度」は、現在にとどまらず、遠い昔から常に国際関係を脅かし続けている。

「あの戦争」も、まさに、このような理想や理念がもたらしたものであった、とも言えよう。「あの戦争」を子どもに語る時に、当時、どんな物事が理想として高く掲げられて、理念を疑おうとしない態度が、どのようにして形成されていたのか、を考えさせたい。その際に、効果的な素材となるものが、当時の子どもたちが使用した教科書である。

「あの戦争」の真っ直中で用いられていた教科書の中から、キーワードを探してみる。

＊

『初等科修身四』（昭和十七年）の「二十　新しい世界」

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争の勃発以来、明るい大きな希望がわき起こって来ました。（中略）わが日本と志を同じくするドイツ、イタリア両国もまた新しい欧州をつくろうとして、地中海に、アフリカに、大西洋に、米英に対する戦をくり

特集　「あの戦争」を子どもにどう語るか

■提言・「あの戦争」を子どもに語るキーワード
侵略、自衛・解放、論争学習……森分　孝治　5
自存自衛、アジア民族の独立、慰霊と鎮魂、原爆……安藤　豊　8
国家的大失敗をどう教えるか……吉永　潤　11
敗戦で得たものを問いなおす迂回を……馬居　政幸　14
「理想・理念」と「取引・談合」……永田　忠道　17
■「平和教育の歴史観」で戦争の本質を語る問題点
斎藤隆夫の反軍演説をどう語るか……江間　史明　20
あまりにも太平洋戦争・東京裁判のことを知らなさすぎる……有田　和正　24
■「大東亜共栄圏」は戦争の大義名分になり得るか
戦争の時代背景を正しく教える……千原　一弘　28
日本が大東亜戦争に突入したのは、自衛のためであった……森下　人志　31
プロパガンダ的戦争史観を超えて……小宮　宏　34
■私なら小学生に「あの戦争」をこう語りたい
授業を通して考えさせたい……田口　広治　37
事実で語る戦争の授業―15年戦争はどの段階でなら止めることができたのか……勇　眞　41
戦争を避けるには、どうしたらよいかを考えさせる授業を構成する……佐藤　琢朗　45
日本は、大東亜戦争で人類最高のよいことをしたのだ……安住　順一　49
原爆投下の事実を考え続ける人に……青柳　滋　53
■私なら中学生に「あの戦争」をこう語りたい
過ちを繰り返さないために伝えたい三つのこと……寺田　充伯　57
伝単に見る戦後六十年……出原　真哉　61
事実を伝え正しい歴史認識を育てる……園山　真司　65
「第三の道」を考える……酒井冨美江　69
太平洋戦争を時間軸と空間軸に位置づける……前原　隆志　73
■「特攻隊員」の死を考える―帰らぬ命ありて平和あり
「恥ずかしいとは思わんのか」……長野　藤夫　77
教師は、正確に神風特別攻撃隊について伝えるべきである！……岡田　健治　80
特攻から何を学ぶことができるのか……谷　和樹　83

〔連載・第5回〕

＊戦後の授業研究の歴史＊
子どもたちの学力と人格に関係と組織で向き合う学習集団……山下　政俊　86
＊親と教師の信頼関係づくり＊
個人情報保護法が家庭や地域との関係を変える……大森　修　91
＊理科は感動だ！＊
理科室経営～使いやすい理科室づくり～……小森　栄治　96
＊法人化国立大学の苦悩―学部長奮戦記＊
ポスト10、プレ10の研修の在り方……明石　要一　101
＊TOSS授業技量検定の成果＊
「すぐれた技術・方法をしっかりと読み」「ライブをじっと見て
ノートする」は必要条件。演習があって教師力は上がる……向山　洋一　106
＊教育課程の見直しに参加して―中教審委員の一人として＊
教育課程部会と各専門部会……安彦　忠彦　111